F-7

統語的複合動詞の分類再考

大野　公裕

１．はじめに－本発表の概要

- 統語的複合動詞の従来の分類：3 種類
  (1) 太郎が$_i$［t_i［ピザを作り］］かけた。（上昇動詞）
  (2) 太郎が$_i$［PRO_i［ピザを作り］］飽きた。（コントロール動詞－自動詞型）
  (3) 太郎が［ピザを作り］忘れた。（コントロール動詞－他動詞型）

- (3)の他動詞型コントロール構文の補部は PRO 主語を持たず、目的語に格を付与しない「再構成」（restructuring）補部（Wurmbrand 2001 など）。

⇒(1)に分類される上昇動詞の中にも再構成補部をとる構文が存在することが予測される。本発表では、(4)のような文がまさにその予測通りの構文であることを焦点要素のスコープ解釈などを証拠に論じる。

(4) ピザが$_i$［t_i 作り］終わった。（cf. 岸本 2005, 2013）

- 本発表の主張が正しければ、<u>統語的複合動詞構文は４種類存在することになり、従来の分類は見直しが必要になる</u>。

２．上昇動詞としての「終わる」

【主張】統語的複合動詞「終わる」は上昇動詞である。

(5) 先行研究における「終わる」の分類：
- 上昇動詞とコントロール動詞（の両方の用法）：影山 1993
- 上昇動詞：Koizumi 1995, 2008, Kageyama 2016
- コントロール動詞（自動詞型）：岸本 2005, 2009, 2013

２.１　上昇とコントロールの区別（影山 1993、岸本 2005, 2009 など）

(6) 上昇動詞：［－外項］
  a. 太郎がピザを作り｛出した／すぎた／かけた｝。
  b. _____［<u>太郎が</u> ピザを 作り］｛出した／すぎた／かけた｝

(7) コントロール動詞：［＋外項］
  a. 太郎がピザを作り｛飽きた／慣れた｝。（自動詞型）
  b. 太郎がピザを作り｛終えた／忘れた｝。（他動詞型）
  c. 太郎が［(PRO) ピザを 作り］｛飽きた／慣れた／終えた／忘れた｝

２.２　両構文の診断法（diagnostics）

❶文イディオム（cf. 岸本 2005, 2009, 2013）

• イディオムの成立条件：イディオムは単一の構成素でなければならない（Radford 2009: 242）。

(8) a. 閑古鳥が鳴き｛出した／すぎた／かけた｝。（イディオム解釈あり）
b. 閑古鳥が鳴き｛終えた／忘れた／飽きた｝。（イディオム解釈なし）

(9) a. _____［閑古鳥が 鳴き］出した
b. 閑古鳥が［（PRO）鳴き］終えた

→「閑古鳥が鳴き」の連鎖が(8a)では構成素を成すが、(8b)では（PRO の有無に関わらず）構成素を成さない。

•「終わる」の場合：

(10) a. やっと［閑古鳥が鳴き］終わって、みんなホッとしている。
b. ［部長の雷が落ち］終わるのをじっと待つしかない。
c. その提案には、すでに［ケチがつき］終わっている。

→イディオム解釈が可能。「終わる」は上昇動詞。

❷前部動詞の受身化（cf. Chomsky 1965: 22-23, Rosenbaum 1967: 59-61）

(11) 上昇構文
a. Barnett seems to have read the book.
b. ＝The book seems to have been read by Barnett.

(12) コントロール構文
a. The doctor tried to examine Tilman.
b. ≠Tilman tried to be examined by the doctor. ((11)-(12) from Davies and Dubinsky 2004: 5)

(13) 上昇構文
a. 太郎が花子を褒め｛出した／すぎた｝。
b. ＝花子が太郎に褒め**られ**｛出した／すぎた｝。

(14) コントロール構文
a. 太郎が花子を褒め｛飽きている／慣れている｝（こと）。
b. ≠花子が太郎に褒め**られ**｛飽きている／慣れている｝（こと）。

•「終わる」の場合：

(15) a. 太郎がすべての餃子を焼き終わった。
b. ＝すべての餃子が太郎によって焼**かれ**終わった。

(16) a. 学生たちがポスターをすべて貼り終わった。
b. ＝学生たちによってポスターがすべて貼**られ**終わった。

→文全体の（認知的）意味は変わらない。「終わる」は上昇動詞。

３．再構成補部

【主張】(3)の他動詞型コントロール構文と(4)の構文（“長距離”上昇構文）の補部は、PRO 主語（外項）を持たず、対格を付与しない「再構成」補部である。

(3) 太郎が［ピザを作り］忘れた。（他動詞型コントロール構文）
(4) ピザが$_i$［t_i 作り］終わった。（“長距離”上昇構文）

３.１　長距離受身（long passive）－後部動詞の受身化（cf. Nishigauchi 1993、影山 1993、岸本 2013）

(17) 他動詞型コントロール構文：長距離受身－可能

a.　太郎はピザを作り｛忘れた／直した／終えた｝。

b.　ピザが作り｛忘れ**られ**た／直**され**た／終え**られ**た｝。

(18) 自動詞型コントロール構文：長距離受身－不可能

a.　太郎はピザを作り｛飽きた／慣れている｝。

b　*ピザが作り｛飽き**られ**た／慣れ**られ**ている｝。

３.２　長距離受身の可能性に関する説明

(19) 岸本 2013

a.　［$_{VP}$ PRO［$_{V'}$ ピザを 作り］］｛忘れる／直す／終える｝（他動詞型：［＋対格］）

b.　［$_{VP}$ PRO［$_{V'}$ ピザを 作り］］｛飽きる／慣れる｝（自動詞型：［－対格］）

→他動詞型の動詞は対格付与能力があるため受身化が可能。自動詞型の動詞は対格を付与しないため受身化が不可能。

(20) 影山 1993、Kageyama 2016

a.　［$_{V'}$ ピザを 作り］｛忘れる／直す／終える｝（他動詞型）

b.　［$_{VP}$ PRO［$_{V'}$ ピザを 作り］］｛飽きる／慣れる｝（自動詞型）

→自動詞型では目的語の主節主語位置への移動が PRO によって阻止される（「移動の局所性」）。

• 他動詞型コントロール動詞の補部（＝再構成補部）の特徴（cf. Wurmbrand 2001, 2016 など）

①PRO 主語（外項）が存在しない。

A．理論的根拠：格付与の局所性（格付与子から最も近い DP に格が付与される）

(21) _____［$_{VP}$ PRO［$_{V'}$ ピザが 作り］］忘れ-られ-た $_{T}$

→PRO が存在すると、主節の T による目的語への主格付与が PRO によって阻止される。

B．経験的証拠：「自分」の束縛（Shimamura & Wurmbrand 2014, Wurmbrand & Shimamura 2017）

(22) a.　太郎 $_{i}$ が［自分 $_{i}$ にテストメールを送り］直した。

b.　*テストメールが太郎 $_{i}$ によって［自分 $_{i}$ に送り］直された。

→PRO が存在すると、PRO が「自分」の先行詞になるはず。

②対格を付与しない（［－外項］⇒［－対格］…ブルツィオの一般化（Burzio’s generalization）から帰結）

⇒長距離受身の可能性を説明する。

(23) a.　_____［窓が 閉め $_{V1}$］忘れ $_{V2}$-られ-た $_{T}$

b.　太郎は［窓を 閉め $_{V1}$］忘れ $_{V2}$-た

→長距離受身の(23a)では V1 が目的語に対格を付与しないので、主節の T が主格を付与できる。

→能動文の(23b)で目的語に対格を付与しているのは V1 ではなく V2。

• 長距離上昇動詞「終わる」の場合：

(24) _____［ピザが 作り $_{V1}$］終わっ $_{V2}$-た $_{T}$

→長距離上昇動詞の「終わる」も再構成補部をとっているとすると、V1 は目的語に対格を付与しない。また V2 も非対格動詞なので、格を付与しない。目的語は主節の T によって主格を付与される。この後、目的語は主節主語位置に（随意的に）移動。

★再構成の詳細なメカニズムについては Wurmbrand 2016, Wurmbrand and Shimamura 2017 を参照。

• 自動詞型コントロール動詞の補部：

(25) 太郎 $_i$ は［PRO$_i$ ピザを 作り $_{V1}$］{飽きた $_{V2}$／慣れている $_{V2}$}。

→V2 が［－対格］なので、目的語の対格は V1 が付与。ブルツィオの一般化により［＋対格］⇒［＋外項］。したがって補部は PRO 主語を持つ。

３.３　数量詞（焦点要素）のスコープ（cf. Koizumi 1995, 2008）

(26) 上昇動詞（非再構成補部）

太郎はサラダだけを食べすぎた。

a. だけ＞すぎる（＝太郎が食べすぎたのはサラダだけだ）

b. すぎる＞だけ（＝太郎がしすぎたのはサラダだけを食べることだ）

(27) コントロール動詞：自動詞型（非再構成補部）

太郎はサラダだけを食べ飽きた。

a. だけ＞飽きる（＝太郎が食べ飽きたのはサラダだけだ）

b. 飽きる＞だけ（＝太郎が飽きたのはサラダだけを食べることだ）

(28) コントロール動詞：他動詞型（再構成補部）

太郎はサラダだけを食べ忘れた。

a.　だけ＞忘れる（＝太郎が食べ忘れたのはサラダだけだ）

b. *忘れる＞だけ（＝太郎が忘れたのはサラダだけを食べることだ）

★スコープの解釈は後部動詞で決まるわけではない。

(29) a. 太郎は［すべての窓を閉め］忘れた。（すべて＞忘れる、*忘れる＞すべて）

b. 太郎は［すべての窓を閉めるのを］忘れた。（すべて＞忘れる、忘れる＞すべて）

→補部の内部構造が関係している。

３.４　スコープの説明

• Koizumi (2008)

(30) 補部内の数量詞のスコープに関する一般化：

V2 ＝［＋対格］（他動詞型コントロール動詞）…スコープは主節のみ。

V2 ＝［－対格］（上昇動詞と自動詞型コントロール動詞）…スコープは補部または主節。

• しかし、スコープは V2 の格付与とは無関係。目的語だけではなく、付加詞も同じパターンを示す（Shimamura and Wurmbrand 2014）。

(31) a. 花子はその店でだけステーキを食べ飽きた。（だけ＞飽きる、飽きる＞だけ）

b. 花子はその店でだけステーキを食べ忘れた。（だけ＞忘れる、*忘れる＞だけ）

(32) a. 花子は太郎からだけお菓子をもらい飽きた。（だけ＞飽きる、飽きる＞だけ）

b. 花子は太郎からだけお菓子をもらい忘れた。（だけ＞忘れる、*忘れる＞だけ）

• Heim and Kratzer (1998)の分析を採用（Shimamura and Wurmbrand 2014, Wurmbrand 2016）：
動詞句（vP）は命題を表す場合のみ QR のターゲットになる。再構成補部は主語（外項）がないので命題としては見なされない。
→再構成補部内の数量詞（焦点要素）は補部ではなく、主節をスコープにとる。

３.５　スコープ解釈からの証拠

(33) 【シナリオ】太郎は大人数のパーティーの準備でピザと餃子を焼いた。

```
        1 時          2 時          3 時          4 時
ピザ    |---------------------------------|
餃子                    |-----------------------------------|
```

(34) 上昇動詞「終わる」（非再構成補部）
a. 3 時に太郎はピザだけを焼き終わった。
「だけ＞終わる」（＝3 時に焼き終わったのはピザだけだ）
b. 2 時に太郎はピザだけを焼き終わった。
「終わる＞だけ」（＝ピザだけを焼くのが 2 時に終わった）

(35) 他動詞型コントロール動詞「終える」（再構成補部）
a. 3 時に太郎はピザだけを焼き終えた。
「だけ＞終える」（＝3 時に焼き終えたのはピザだけだ）
b. 2 時に太郎はピザだけを焼き終えた。
「*終える＞だけ」（＝ピザだけを焼くのを 2 時に終えた）

(36) <u>長距離上昇動詞「終わる」</u>
a. 3 時にピザだけが焼き終わった。
「だけ＞終わる」（＝3 時に焼き終わったのはピザだけだ）
b. 2 時にピザだけが焼き終わった。
「*終わる＞だけ」（＝ピザだけを焼くのが 2 時に終わった）
→<u>再構成補部をとっている証拠</u>

４．まとめ

(37) ＜4 種類の統語的複合動詞＞

	上昇動詞：［－外項］	**コントロール動詞**：［＋外項］
非再構成補部	すぎる、かける、終わる、etc.	飽きる、慣れる、etc.
再構成補部	終わる	終える、忘れる、直す、etc.

＜参考文献＞

Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Davies, William D. and Stanley Dubinsky. 2004. *The grammar of Raising and Control*. Oxford: Blackwell Publishing.

Heim, Irene and Angelika Kratzer. 1998. *Semantics in generative grammar*. Oxford; Cambridge, MA: Blackwell Publishers.

影山太郎. 1993.『文法と語形成』東京：ひつじ書房.

Kageyama, Taro. 2016. Verb-compounding and verb-incorporation. In *Handbook of Japanese lexicon and word*

formation, ed. by Taro Kageyama and Hideki Kishimoto, 273-310. Berlin: Walter de Gruyter.
岸本秀樹. 2005.『統語構造と文法関係』東京：くろしお出版.
岸本秀樹. 2009.「補文をとる動詞と形容詞－上昇とコントロール」影山太郎（編）『日英対照　形容詞・副詞の意味と構文』152-190. 東京：大修館書店.
岸本秀樹. 2013.「統語的複合動詞の格と統語特性」影山太郎（編）『複合動詞研究の最先端―謎の解明に向けて』143-183. 東京：ひつじ書房.
Koizumi, Masatoshi. 1995. Phrase structure in minimalist syntax. Ph.D. dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
Koizumi, Masatoshi. 2008. Nominative object. In *The Oxford handbook of Japanese linguistics*, ed. by Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito, 141-164. Oxford: Oxford University Press.
Nishigauchi, Taisuke. 1993. Long distance passive. In *Japanese syntax in comparative grammar*, ed. by Nobuko Hasegawa, 79-114. Tokyo: Kurosio Publishers.
Radford, Andrew. 2009. *Analising English sentences: A minimalist approach*. Cambridge: Cambridge University Press.
Rosenbaum, Peter S. 1967. *The grammar of English predicate complement constructions*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
Shimamura, Koji and Susi Wurmbrand. 2014. Two types of restructuring in Japanese—Evidence from scope and binding. In *7th Formal approaches to Japanese linguistics*, 203-214. MITWPL, Department of Linguistics and Philosophy, MIT, Cambridge, Mass.
Wurmbrand, Susanne. 2001. *Infinitives: Restructuring and clause structure*. Berlin: Mouton de Gruyter.
Wurmbrand, Susanne. 2016. Complex predicate formation via voice incorporation. In *Approaches to complex predicates*, ed. by Léa Nash and Pollet Samvelian, 248-290. Leiden: Brill.
Wurmbrand, Susi and Koji Shimamura. 2017. The features of the voice domain: Actives, passives, and restructuring. In *The verbal domain*, ed. by Roberta D'Alessandro, Irene Franco, and Ángel J. Gallego. Oxford: Oxford University Press.

［所属］北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院
［メール］ohno@imc.hokudai.ac.jp